匈奴・サルマタイ時代のユーラシア草原西部の帯飾板について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31443

匈奴・サルマタイ時代のユーラシア草原西部の帯飾板について

髙濱　秀
（金沢大学歴史言語文化学系）

1

ユーラシア草原地帯の東に匈奴、西にサルマタイが大勢力を誇っていた時代、遊牧民の墓からは、副葬品として帯の飾板が多く発見される。東方では中国の北の遊牧民の墓だけではなく中国の内地においても見出され、そのほかモンゴル、ザバイカリエの匈奴墓や、トゥバ、ミヌシンスク地方などでも多くの例が発見されている。匈奴・サルマタイの中間地域では、西シベリヤのオビ川・イルティシュ川附近で出土したとされるピョートル大帝シベリヤ・コレクションには多くの帯飾板が含まれており、豪華な金製品の例としてよく知られている。さらに西方では、西シベリヤ、ウラル地方、ヴォルガ川流域、黒海沿岸などにも分布している。またウズベキスタンなどの旧ソ連領中央アジアにも見出される。

本稿ではユーラシア草原の西方で発見される帯飾板を分類しつつ紹介し、各々の系統関係について考えてみたい。

2

A. 中国のものと似た帯飾板（図 1）

まず最初に、中国で発見される帯飾板とかなり近いと考えられるものを挙げておきたい。シベリヤ・コレクションのなかに知られる龍紋の飾板とほぼ同紋様のものが、中国寧夏回族自治区同心県倒墩子の墓地から出土していることは、すでに知られている（寧夏文物考古研究所等 1988，図版 16-4；東京国立博物館等 1985，No.17）。また中国で時折見られる横にしたＢ形の飾板のうち、猛禽の加わる動物闘争紋を表す飾板が、シベリヤ・コレクションのなかに類似品をもつことも、周知のことであろう（東京国立博物館　1997，No.213; 東京国立博物館等 1978，No.13）。これらの例は、両地域の間になんらかの影響関係が存在したことを、如実に物語っている。これらの帯飾板の起源が、中国の北か、あるいはシベリヤか、どちらにあったかという問題は、ひとまず擱くことにするが、上述のほかにも中国のものとよく似た帯飾板は、西方で数点知られている。

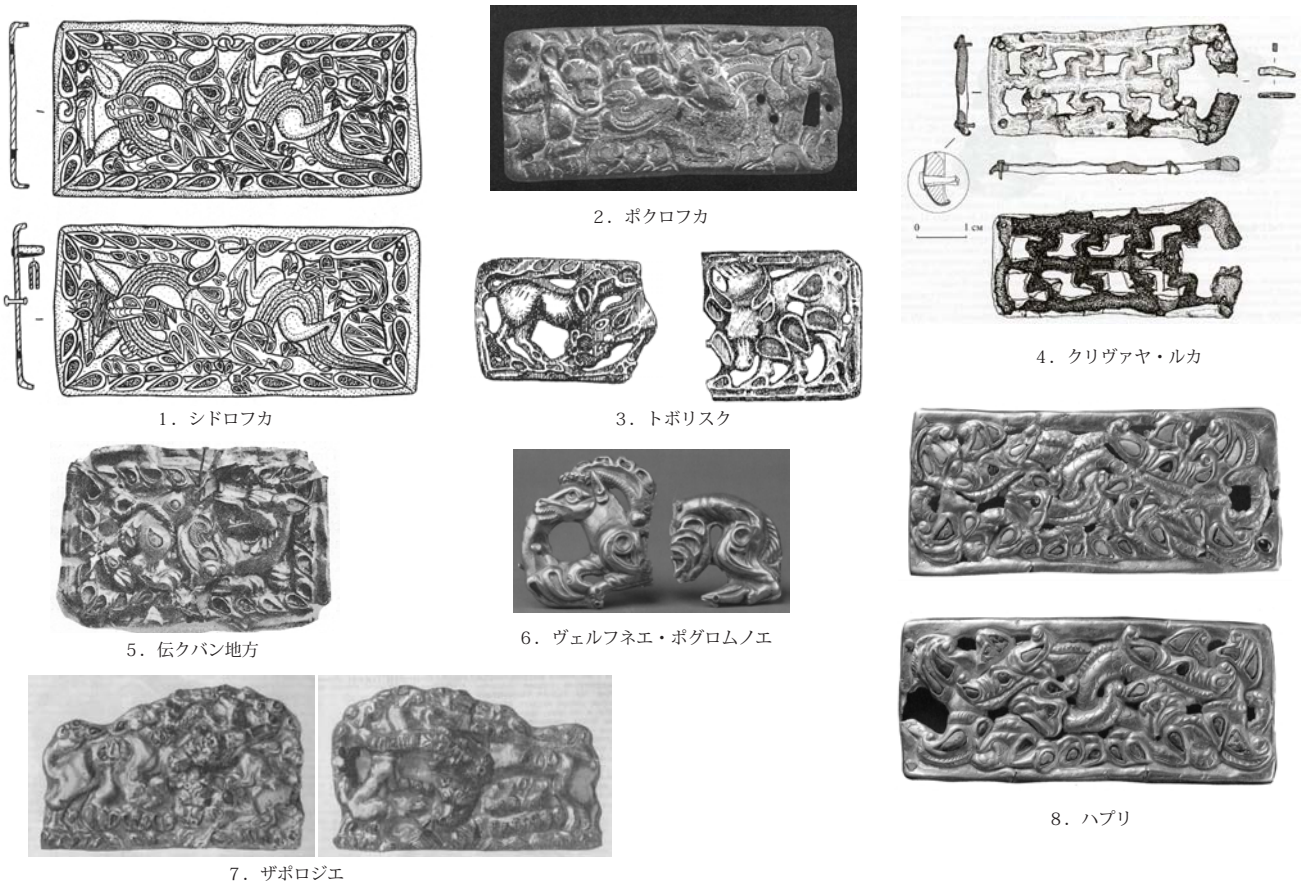
A-1. シドロフカ Sidorovka

この古墳群はイルティシュ川の右岸に位置し、オムスク州のニジネオムスク地区シドロフカ村から３km のところにある古墳群である。1 号墳の２号墓から、豊かな副葬品が発見された。中には、グリフィンを表わした 1 対の馬具飾（ファレラ）などがあるが、最も興味あるものは東方の匈奴などとも関連する品である。

長方形帯飾板が 1 対、被葬者の骨盤の両側から発見されている (Матющенко, Татаурова 1997, Рис.27)。金製で、トルコ石、珊瑚、琥珀が象嵌されている。周囲を木の葉状の連続からなる枠で囲み、なかに２頭の虎と龍が争うありさまを表わしている。１対のうちの１枚には裏面の四隅の１箇所に青銅製のループ状のものが付いているが、他の３箇所では３つの大きな孔と溶接の痕跡がある。この飾板の表面の一端にはトルコ石を象嵌した突起がある。もう一枚の帯飾板の裏面にはループはなく、溶接の痕跡があるだけである。

他にも被葬者の腰の辺りからは、やはり象嵌を施した金製の小型帯飾板や、銀製の帯の留金が出土している。また足先附近からは一端にトルコ石象嵌の突起の付いた金製の枠状の留金が発見されている。おそらく靴の留金であろう。またこの墓の東南隅と西南隅からは青銅製の鍑が出土している。これらの鍑は、型式的に現在知られている匈奴の鍑の原型ともいうべきものと考えられる（髙濱 2011, 38 頁）。

報告書では、多くの様々な資料を引用して、最終



1．シドロフカ　2．ポクロフカ　3．トボリスク　4．クリヴァヤ・ルカ　5．伝クバン地方　6．ヴェルフネエ・ポグロムノエ　7．ザポロジエ　8．ハプリ

図１．帯飾板Ａ類

的にこの遺跡の年代を２－４世紀と考えているが、中国に関係する資料のほうから見ると、これは遅すぎるように思われる。鍑の型式と、ここで述べた帯飾板の型式から考えると、前３世紀末から前２世紀頃と考えたいところである。

A-2. ポクロフカ Pokrovka 2

ウラル地方のこの墓地では、サルマタイ時代の17号墳２号墓から青銅製鍍金の帯飾板が出土した（Davis-Kimball and Yablonsky 1995/96, Pl.7）。これは枝角をもつ馬のような動物に、熊と狼のような動物が襲いかかる情景を表わしたもので、中国では江蘇徐州獅子山や陝西西安東郊三店村から同じ図柄のものが出土している（鄒厚本、韋正　1998；朱捷元, 李域錚　1983）。この飾板はここでは帯の飾板として用いられていたのではなく、矢筒の装飾として使用されていたらしい。このサルマタイの墓は、前期サルマタイ期に属し、前４～２世紀のものと考えられている。鍍金されていることなど、ほとんど中国あるいは匈奴で作られた製品に思えるが、一方、向かって右端の、中央のわずかに張り出した形と、そこにある小さな孔は中国などの出土品にはない形である。孔は、外向きの別作りの金属製突起を挿入したものかもしれない。そのような例は、亜炭製の帯飾板にしばしばみられる。通常この種の帯飾板は一対で使用されるが、その場合、向かって右側の板の左端（つまり内側）近くに孔があり、左側の板には孔がないのが殆どである。このポクロフカ出土の帯飾板は、図柄からみると左側に装着されるべきものなので、これはその右端部に縦長の孔をあけ、突起のための小孔をあけるなどの改造を施した可能性がある。

A-3. トボリスク Tobol'sk 附近

シドロフカよりさらに西方でも、匈奴型式の帯飾板の発見例がある。西シベリヤのトボリスクの画家ズナメンスキーの収集品がトムスク大学の博物館に所蔵されているが、なかに、２枚の帯飾板の断片が含まれている（Heikel 1894, Pl. Ⅸ -1, Ⅹ -2）。１枚は２頭の馬が闘う場面を表わしたものであり、もう

１枚は２頭の牛が佇立するものである。２頭の馬の飾板は、ザバイカリエの匈奴の墓地デレストゥイで発見されている（図 8）。また２頭の牛のものは中国では遼寧省西豊県西岔溝で出土しているほか（中国科学院考古研究所 1963, 図版 229）、クラスノヤルスク近くのウチンカで出土しており（Бобров 1979）、またその近くのコソゴルの一括遺物の中にも含まれている（Нащекин 1967）。これらの例は、シドロフカ出土品よりも少し遅い時期のものと考えてよいであろう。デレストゥイでは五銖銭と伴出しており、西岔溝墓地は前漢の武帝・昭帝期と考えられている。すなわちやはり前２世紀の後葉から前１世紀ほどであろうか。

A-4. クリヴァヤ・ルカ Krivaya Luka Ⅷ

アストラハン州チェルノヤル区で調査されたクリヴァヤ・ルカⅧ墓地５号墳 12 号墓は、サルマタイ貴族の墓であった（Дворниченко et al. 2008）。衣服に縫い付けた数百の小型金製品、螺旋状の矢筒飾金具では、鉄鏃、鞘に金製薄板の貼られた鉄剣などが出土し、隠し場所からは銀製の馬具飾ファレラの入った鍑が発見された。ここで取り上げる帯飾板は、被葬者の薦骨のあたりで発見されたもので、階段状の紋様を透かし彫りにして作られている。本体は木製でそれに鉄板を載せその上に金の薄板を貼ったものである。端部には元来鉤が付く。これを紹介した V.V. ドヴォルニチェンコ達は、これをデヴレトが紹介するオルドスやシベリヤ出土の帯飾板を模倣したものと考えている。この理解は正しいであろう。彼等は、この墓を埋葬儀礼や副葬品から、初期サルマタイ文化の最後の時期で、前１世紀の中頃と考えている。

A-5. 伝クバン Kuban 地方出土

北カフカスの西側、クバン地方から出土したという飾板が、トルストイ・コンダコフによって紹介されている (Minns 1913, Fig.205)。長方形を呈する金製の飾板で、周囲を木の葉形の有色の象嵌によって囲まれ、中には振り返った動物が表される。動物の身体の随処にも木の葉形の象嵌が配置されている。振り返った動物の姿勢は、後で述べるニコリスキー出土品とも通じるところがあるが、後肢を上へひねった形ではないらしい。出土地やその他の情報がないのが残念である。シドロフカ出土例と同様に、木の葉状の象嵌による枠は、中国の帯飾板と共通するもので、その影響と考えることが許されるであろう。シベリヤ・コレクションにおいても、木の葉状の象嵌紋様の枠で囲まれた帯飾板は、多くはない。中国の寧夏同心県倒墩子出土例と同紋様の、龍が対称的に対置された１対の帯飾板と、それに附属すると思われる小型の飾板だけである。

A-6. ザポロジエ Zaporozh'e・クルガン

ザボロジエ・クルガンからは、３頭の獣が争う情景を表わした１対の金製帯飾板が出土した (Манцевич 1976, Рис.2-4)。動物が複雑に絡み合った紋様で、要所に石が嵌められている。この帯飾板は、1968 年にザポロジエの町はずれの、キチカスという村にある高さ２ｍの、すでに破壊された古墳から出土したものである。同時に発見されたものは、両端に馬頭のついた腕輪、動物闘争紋の帯飾板１対、６点の青銅製動物紋様のファレラ、２点の鉄製ロゼッタ紋様のファレラである。

帯飾板は倒したＢ形を呈し、図柄は２枚が線対称的になっている。怪獣２頭と牛を表したもので、下に牛がおり、その後ろから怪獣が襲いかかる。牛の前方からも怪獣が襲いかかるが、その前肢は牛の頸に置き、口ではもう１頭の怪獣の頸に噛みついている。怪獣の尾や周囲にはグリフィンの頭が付いている。パジリク２号墳の文身や、中国の浮彫式の帯飾板などによく見られる怪獣の１種であろう。向かって右側に配置される帯飾板には、帯を留めるための突起が左端に付いている。帯飾板は鉄地で、鍛造で紋様を表した金板が貼られている。青、灰緑、褐色に染められた歯玉石が随処に象嵌されている。鉄板には上下２つずつの、幅５㎜のループが元来４つ付いていた。ループは径４㎜で、水平に取り付けられており、そこを通る革紐は縦方向であった。ループのなかに革の痕跡があるものもある。

A-7. ハプリ Khapry

ドン川下流域ロストフのチャルトィリ村、ハプリ墓地からは、各々２頭の龍とグリフィンが戦う場面を左右対称に表わした金製長方形帯飾板が１対出土している（古代オリエント博物館等　1991, No.99）。龍・グリフィンの目や耳などには、珊瑚、ザクロ石、

図２　帯飾板Ｂ類

ガラスなどが象嵌されている。裏面には革帯に縫い付けるための環が４つ付いている。

A-8. ヴェルフネエ・ポグロムノエ Verkhnee Pogromnoe

ヴォルガ下流域のヴェルフネエ・ポグロムノエからは、動物を表わした金製の帯飾板が出土している（東京国立博物館，日本経済新聞社　1978、No.17）。動物の頭側の端部中央にはループがあり、そこから外側へ向く鉤の痕跡がある。腰には、円形の両側に曲線三角形２つという、シベリヤ・コレクションの金製品の動物紋様と共通した紋様がある。前１世紀頃と考えられている。

B. 猛獣と駱駝との闘争を透かし彫りで表すもの（図２）

この図柄の帯飾板は６点発見されている。

B-1. 中央カザフスタンのカラムルン Karamurun II

この墓地はセミパラチンスクとツェリノグラートの間に位置し、タスモラ文化に属するとされる。この一号墳は高さ 0.4 m、径 10 mで、墓壙は中心から西にずれて発見された。1.9 × 0.8 mの楕円形の墓壙で、すでに盗掘されていた。成人男子が頭を南西に向けて仰臥伸展葬で葬られていた。ここでは被葬者の左側の骨盤と肘の骨の間に透かし彫りの帯飾板が発見された（Маргулан et al. 1966, с.399, Рис.64）。そのほか、石製奉献台の破片、鉄剣の破片、青銅製、鉄製、骨製の鏃が出土している。石製奉献台は、少し長めの形によって、早い時期の同種のものと区別されるという。鉄剣の破片のなかには、サルマタイ前期とされるプロホロフカ型剣の弧形柄頭の破片があった。

帯飾板は、猛獣と駱駝の闘争を表しているが、左側が欠けている。四隅には帯に装着するための孔がある。報告書では、この墓をタスモラ文化の２期（前５～３世紀）に入れるが、その中でも最も遅い時期であり、前２世紀も可能と考えている。

B-2. タスタグム Tastagym

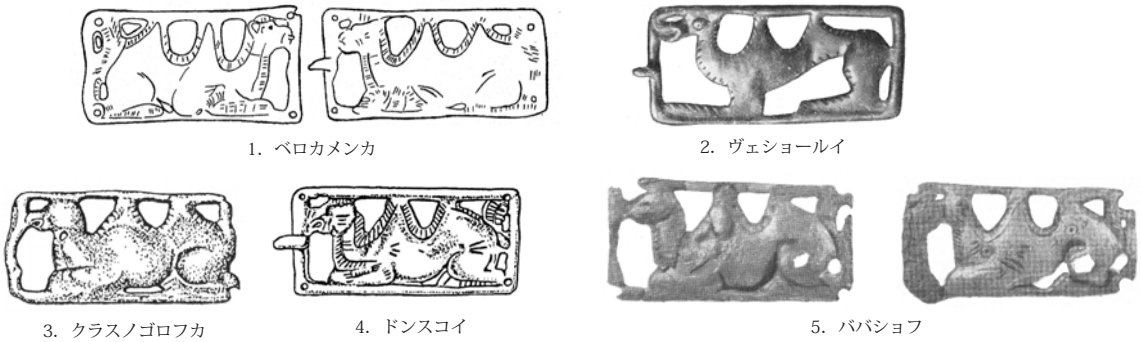
西カザフスタンのグリエフ州クズルオルダ区のアバイ名称ソフホーズで、砂丘が風に吹かれて墓が露出して、発見されたものである (Акишев 1976, с.188)。頭位を南にした人骨が見出され、馬骨、青銅鏃がそれに伴って見出された。A. K. アキーシェフによると青銅製の鏃は前６～４世紀、或いはむしろ前５～４世紀のものであるが、帯飾板はサウロマタイの駱駝紋様や、他の類例から判断して前４～３世紀の境目ごろだろうという。

B-3. チェリャビンスク Chelyabinsk

シベリヤ鉄道の建設によって破壊された古墳から、この種の飾板の破片が出土している（Heikel 1894, Pl.XV-4）。K. F. スミルノフによると、出土地はヴァニュシという村であったらしい (Смирнов 1964, Рис.80-19)。襲いかかる猛獣と、駱駝の前半身の部分が残っている。

B-4. シャフリヴァイロン Shakhrivairon

この墓地は、ウズベキスタン、ブハラ・オアシスの近くにあるキジル・テペの９㎞北に所在する (Обельченко 1978)。その２号墳は径 10 m、高さ 0.5 mの古墳であるが、その中央の地下式横穴の墓壙からは、頭を南に向けた人骨が発見された。出土した遺物には、鉄剣、鉄鏃、陶製把手付瓶、陶製杯、湾曲した刀子、羊の前足があり、被葬者の腰のあたりから、骨製の保存のよくない帯留め具と、可動式針付の鉄製環形帯留め具、透かし彫りで猛獣と駱駝の闘争を表した青銅製の帯飾板が見出された。四隅に孔が開けられ、片側に帯を留めるための突起がある。この墓は前１世紀から後１世紀のものと考えられている。



1. ベロカメンカ　2. ヴェショールイ　3. クラスノゴロフカ　4. ドンスコイ　5. ババショフ

図３．帯飾板Ｃ類

B-5. リャヴァンダク Lyavandak

同じくブハラ・オアシスに所在するリャヴァンダク古墳群の 16 号墳から同じ紋様の帯飾板が出土している (Обельченко 1992)。

B-6. ペトルニノ Petrunino II

ヴォルゴグラード州カムィシン区の、ドン河左側の支流であるイロヴリ川流域のペトルニノⅡ墓地 1 号墳 14 号墓から、同紋様の帯飾板が出土している（Сергацков 1999, Рис.1-2)。この墓は青銅器時代の 1 号墳に掘りこまれた墓であり、前期サルマタイ時代と考えられている。この墓からは、環頭の鉄剣、弧形の柄頭を持つプロホロフカ型鉄剣、土器、青銅製鏡の破片などが出土している。帯飾板は向かって左側は欠けており、鉤は欠失している。報告した I. V. セルガツコフはこの墓地で発見された前期サルマタイ墓をほぼ同時期と捉え、出土したフィブラの年代から、後 1 世紀まで下がりうると考えている。

C. 一頭の駱駝を透し彫りで表す帯飾板（図 3）

闘争文ではなく、1 枚の帯飾板に 1 頭の駱駝を表すものである。端部に付けられた鉤は、B とほぼ同様である。

C-1. ベロカメンカ Belokamenka II

ヴォルゴグラード州のベロカメンカⅡ -88 墓地 7 号墳 3 号墓から 1 対の駱駝形帯飾板が出土している (Мордвинцева, В. И., О. А. Шинкарь 1999, Рис.4-17)。それぞれ 1 頭の双峰駱駝が脚を折って蹲った形を透かし彫りで表わしている。この 1 対の帯飾板の紋様は互いに向かい合った対称形をなしており、向かって右側の帯飾板の左側には外側に向かった突起が付けられている。帯飾板の四隅にはそれぞれ小さな孔が開く。この墓は、竪穴の東側に墓室を作ったいわゆる偏洞墓で、頭位は南側である。16 歳ほどの女性と 60 歳くらいの男性が葬られていた。男性には環頭柄頭の長剣、薄い金板で飾られた鞘入りの短剣、青銅製・鉄製の鏃、鏡、砥石、金製ビーズの首飾り、金製腕輪などが伴っており、２枚の帯飾板は腰のあたりから発見された。女性には羊の骨、鉄製刀子、土製紡錘車、骨製管、鉄製環、珊瑚の首飾り、ガラス製などのビーズが伴っていた。この墓は前２～１世紀のものと考えられている。

C-2. ヴェショールイ Veselyi

北カフカスのマヌィチにおいて、駱駝を透かし彫りに表わした帯飾板が出土している。M.I. アルタモノフが 1937 年に発掘したもので、ヴェショールィ 2 号墳 6 号墓で発見された（Артамонов 1949, Рис.18)。２号墳は南北 30 m、東西 33 mの古墳で、中に 8 基の墓が発見された。６号墳には仰臥伸展葬の男性の遺体があった。青銅鏡の破片、砥石の破片、鉄製の棒、鉄製刀子破片、腰のところに駱駝紋様の帯飾板、弧状の柄頭を持つ鉄剣、鉄製環、陶製瓶、そして黒色磨研のカンタロス型杯が出土している。アルタモノフはこの墓から出土した陶製瓶と鉄剣からこの墓を前２世紀前半に年代付け、帯飾板とカンタロスをアジアとギリシア世界との間の交易において、この地方の遊牧民が果たした役割を象徴するものと考えている。

C-3. ドン川下流域、アゾフ付近のクラスノゴロフカ Krasnogorovka III、11 号墳 10 号墓（Королькова 1999, Рис.4-8）

C-4. ドン側下流域、「ドンスコイ Donskoi」墓地 1 号墳 21 号墓（Королькова 1999, Рис.4-10）

C-5. ババショフ Babashov

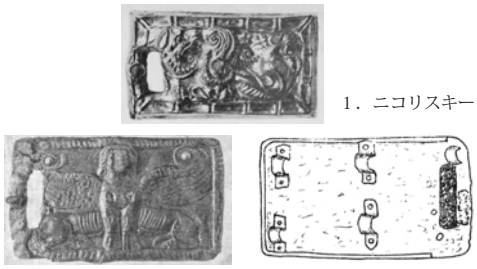
ババショフ墓地は北バクトリアにあるクシャン時代の遊牧民の墓地である。ここでこの駱駝を表した帯飾板が発見された (Мандельштам 1975, Таб.XXXⅢ-8, 9, XXXⅥ-7, 8)。発掘は 1960 年と 1962 年に、ソ連科学アカデミー考古学研究所とタジキスタン共和国ドニシャ名称歴史研究所によるタジキスタン考古学調査団によって行われた。この遺跡はトルクメニア共和国に属し、アムダリヤの右岸にある。２枚の駱駝紋様飾板が出土したのは第ⅩⅣ群 25 号墓であった。この墓は 2.2m × 0.8 mの長方形の土壙墓で、帯飾板は被葬者の腰のあたりから２枚発見された。頭の横に陶製の杯があり、また羊の骨が置かれていた。また鉄製の指輪や真鍮製の環などが出土している。帯飾板は、それぞれ１頭の双峰駱駝が脚を折って蹲った形を透かし彫りで表わしている。駱駝は共に左側を向いており、それぞれ四隅に、帯に付けるための小さな孔が開けられている。どちらにも帯を留めるための突起は付いていないようである。片方は一端が壊れ、鉄板により補修が施されている。ババショフ墓地の年代は、前１世紀から後２世紀と考えられているが、後３世紀の初めも除外されていない。そしてここの多くの墓地は紀元後のものと考察されている。

D．透かし彫りではない長方形の帯飾板（図 4）

D-1. ニコリスキー墓地 Nikol'skii

ヴォルガ下流域のアストラハン州エノタエフスキー区ニコリスキーにあるサルマタイの墓地から、この種の帯飾板が発見されている (Засецкая 1979. Рис.22)。帯飾板が出土したのは 12 号墳である。これは直径 18 m、高さ 0.5 mの古墳で、中央に 2 × 2.1 mの墓壙があった。被葬者は頭位を東南に、墓壙の対角線上に葬られていた。

帯飾板は被葬者の腰骨あたりに発見された。長方形で、青銅製の本体の上に金製の薄板が貼られている。そこには後半身を上に捻って振り上げ頭を振り返らせた、翼のあるライオン・グリフィンが浮き彫りで表わされている。耳、肩、腹、腿にはしずく形の青色のペーストが象嵌され、全体の長方形の枠にも 15 の青色のペーストの象嵌のある窪みがある。



1．ニコリスキー

2．バラノフカ

図４．帯飾板Ｄ類

一つの短辺のところには長方形の孔があり、その外側に、革紐を留めるための突起があり、円形の象嵌がされている。大きさは長さ 6.5㎝、幅 3.2㎝である。

他にこの墓からは、金製腕輪、金製薄板、環頭の鉄剣、鉄製馬具、土器、ローマ時代に流行した羊頭付柄の付いた容器パテラなどが出土している。パテラは後１世紀のものと考えられている。

帯飾板はヴォルガ下流域およびドン川流域に紀元前後から後２世紀頃まで見られるサルマタイ動物意匠の例と考えられており、報告書では、この墓を含むこの墓地の４基のサルマタイ墓を中期サルマタイ文化、後１世紀後半から２世紀の初めと考えている。

枠が象嵌のための長方形の窪みからなるのは、中国出土の帯飾板にも時折見られる。

D-2. バラノフカ Baranovka

アストラハン州チェルノヤル区バラノフカにおいて発掘された 13 号墳１号墓において、スフィンクス紋様の帯飾板が発見されている (Дворниченко, Федоров-Давыдов 1989, Рис.19)。この古墳は 20 × 26 mの大きさで、1.7 × 1.55 mの土壙はそのほぼ中央にあった。被葬者の骨は頭を東南にして斜めに仰臥伸展葬で葬られ、土壙の北東隅には陶製の瓶、北西隅には、先に鉤のついた鉄製の棒が発見されている。帯飾板が遺体の腰のあたり右側に発見されたほか、遺体に接して鉄製刀子などが出土している。

帯飾板は７× 4㎝、青銅製で上に銀板が貼られている。銀板には鍍金の痕跡があり、正面を向いたスフィンクスの紋様が浮彫状に施されていた。両側に一対の翼があり、胴の後半部と後脚も両側に表わされている。翼の先には黄色のペーストが象嵌される。全体を囲む長方形の枠には斜めの刻み目紋様が施され、向かって左端には縦の長方形の孔があり、その外側に外側を向いた突起が付く。裏側には帯に留め

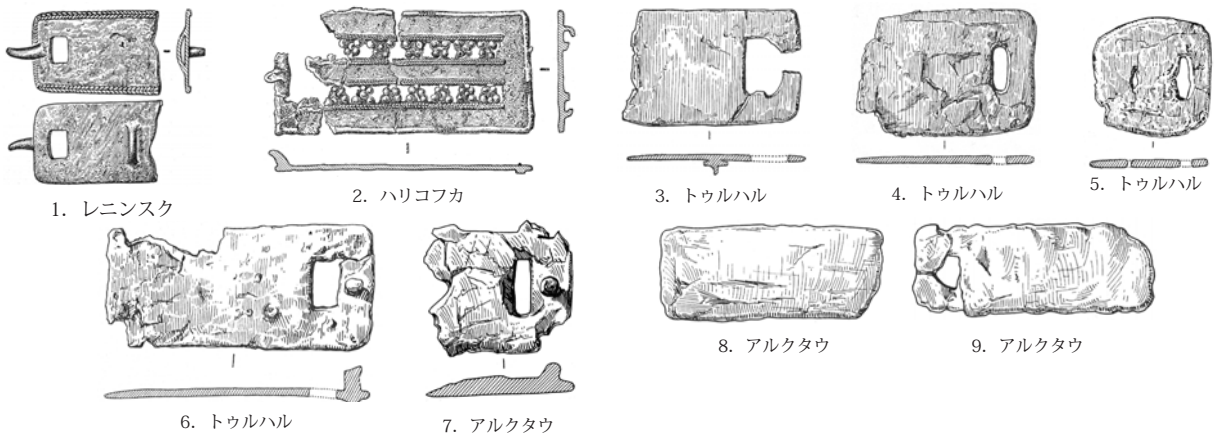


図５．帯飾板Ｅ類

るためのループが４つ鋲留めされているようである。帯飾板とともに、両端に鋲のついたＵ字形金具も発見されている。

この墓の年代は中期サルマタイ時代と考えられている。

Ｅ．板状の帯飾板（図 5）

E-1. レニンスク Leninsk

青銅製。ヴォルゴグラード州のレニンスク４号墳５号墓で、1956 年にシーロフにより発掘されたという（Мошкова 1960, Рис.2-2）。

E-2. ハリコフカ Khar'kovka

青銅製。ハリコフカⅢ、９号墳出土（Мошкова 1960, Рис.2-3）。

E-3. トゥルハル Tulkhar 墓地

鉄製。板状の帯飾板は１１例発見されている（Мандельштам 1966, Табл.XLI-15-17, XLII-1-8）。一端に細長い孔があり、孔と端との間に鉤のあるものもある。四隅に小さな孔のあるものもある。ほとんどのものが腰の左側に発見されているが、腰のあたりに対をなして並べられていた例もある。

E-4. アルクタウ Aruktau 墓地

鉄製（Мандельштам 1975, Табл.XIV-1-8）。一端に細長いスリットがあり、２例ではそのスリットと端の間に鉤が出ている。また四隅に帯に取り付けるための小さな孔のあるものもある。また XI 号墳では腰のあたりに、一端に細長い孔のあるものと、ないものが並んで発見された。帯にセットとして取り付けられたと推定されている。

Ｆ．小型の透かし彫りで紋様を表すもの（図 6）

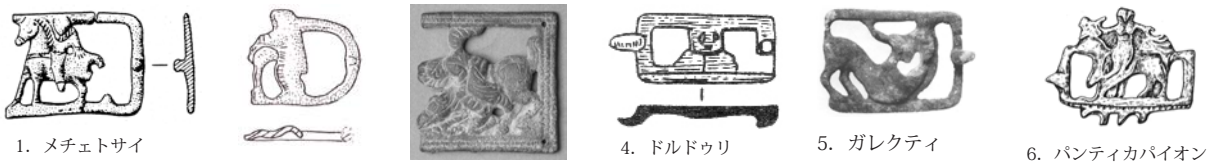
F-1. メチェトサイ Mechetsai

ウラル川の左側の支流イレク河流域にあるメチェトサイ墓地は、サウロマタイおよびサルマタイの墓からなっているが、その３号墳 11 号墓から騎士を透かし彫りにした帯飾板の破片が出土している (Смирнов 1975, Рис.34-9)。３号墳は高さ 1.14 m、径 20 mの古墳で、なかに 16 基の墓が発見された。11 号墓は少し西側に張り出した形の長さ 2.5 mの長方形の墓で、被葬者は頭を南側に向けて葬られていた。遺体の右側に、青銅製の鐔の付いた長さ 97㎝の鉄製の長剣があり、鉄製の鏃の付いた矢が数本置かれていた。左側には矢筒が置かれていた。矢筒の下、腰のあたりに帯飾板が発見され、その傍には衣服の切れ端が見出された。帯飾板の向かって右側の枠には小さな突起があるが、帯を留めるための鉤形の突起は、失われた側にあったと推定されている。

この３号墳から発見された 16 基の墓は殆どが前４世紀末から３世紀の比較的短期間に営まれたものと考えられている。11 号墓は、他の墓では青銅鏃が多いがこの墓では鉄鏃だけであることや、鉄剣の型式、そして墓の型式からも、このなかでは最も遅いと考えられ、前２世紀とされている。他と同様にこの墓もプロホロフカ文化に属すると考えられている。

F-2. ドゥアナ Duana

カスピ海とアラル海の間に広がるウスチュルト高原においてもこの種の帯飾板が発見されている（Ягодин 1978, Рис.28）。ウズベキスタンの、アラル



1. メチェトサイ　2. ドゥアナ　3. カンプィルテパ　4. ドルドゥリ　5. ガレクティ　6. パンティカパイオン

図６．帯飾板Ｆ類

海の西海岸、ドゥアナという墓地である。このあたりには古代・中世の古墳が多く知られているが、飾板が発見されたのは、ドゥアナ墓地の第３グループの９号墳である。これは四方に大きな板石を立てて囲った石槨墓で、大きさは３× 2.3 m、南北の方向に営まれている。すでに盗掘されていたが、中には２人分の人骨があり、頭位は南であったと推測されている。帯飾金具は墓の中央で発見されたが、破片であり紋様も不明である。枠の部分の一端に突起がある。この帯金具のほかに、土器片や２個の紡錘車が出土している。報告では帯飾金具により考えられる年代は前６～２世紀であるが、紡錘車をも考慮に入れると、前５～２世紀になるという。

F-3. カンプィル・テパ Kampyrtepa

ウズベキスタンのカンプィル・テパからは、長方形透かし彫り帯飾板の断片が出土している（ウズベク共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所・創価大学 1991，No.167）。枠の中には、短い上着とズボンを身に着けた騎士の姿と、足を折った姿勢の馬が見える。戦闘場面であろうか。四隅に小さな孔が開けられている。前２～１世紀と考えられている。

F-4. ドルドゥリ Dordul'

北西トルクメニアの涸れ谷ウズボイ流域の遺跡からも透かし彫りの飾板が発見されている (Мошкова 1992, Табл.50- Ⅵ)。

F-5. ガレクティ Ghalekuti Ⅱ

イラン、デーラマン地方のガレクティⅡ墓地２号墓から透かし彫り動物紋の帯飾板が出土している（東京大学東洋文化研究所 1968，図版四五 -8，七七 -8）この帯飾板の出土した墓からは、土器のほか、青銅製円盤２、鉄刀２、銀製耳環などが出土している。この墓の年代には様々な説があり、報告書ではアケメネス朝並行期としており、デーラマン古墓の土器を考察した三宅俊成氏も鉄器時代の (1) に入れて、「前期（アカイメネス王朝時代？）」としたが（三宅 1976，p.327）、堀晄氏はこの帯飾板や、鏡、化粧棒、蜻蛉玉などを根拠として、この墓などの墓群を前２世紀、あるいはもう少し広く取って前３～１世紀と考えた (Hori 1981, p.51)。最近の有松唯氏の論考では、イラン鉄器時代Ⅳ期の中に入れ、その中では晩い方で、ポスト・アケメネス朝期に近いと考えている（有松 2010, p.98）。ここから出土した帯飾板は、透かし彫りで動物を表しているが、鋳造の不良により、おそらく頭を振り返らせたと思われる動物の前半身の形ははっきりせず、また動物の後半身の側の枠は欠失していると思われる。おそらくその意図した形は、動物の形は幾分異なるが、V. S. カーティスの紹介した大英博物館所蔵のパルティア時代と推定される帯飾板と、極めて近い形だったのであろう (Curtis 2001, Pl.X Ⅲ a)。その幾分横に細長い形は前に述べた猛獣・駱駝闘争紋や駱駝１頭の帯飾板と近い形である。また大英博物館所蔵例では、四隅に孔が開いているが、これもそれら中央アジア・サルマタイ型の帯飾板との類似を示すといえよう。

F-6. パンティカパイオン

黒海北岸の都市遺跡からも、この種の飾板が出土している（Кошеленко et al. 1984, Табл.CLV-3）。この例は紀元後 1-3 世紀とされているが、他にも例はあるようである。

3

以上の集成の結果、幾つかの結論が得られる。まず北中国出土品と深い関係を持つものとして最初に挙げたＡであるが、なかでもポクロフカ２とトボルスク附近発見のものは、ほとんど中国の北で作られたと考えてもよいものである。シドロフカ出土例は、同じものは今のところ中国で発見されていないが、紋様の同じ青銅製品は出土例がある。寧夏同心県出土のものに対するシベリヤ・コレクションの類例と、同じ関係といってよい。クリヴァヤ・ルカ出土のも

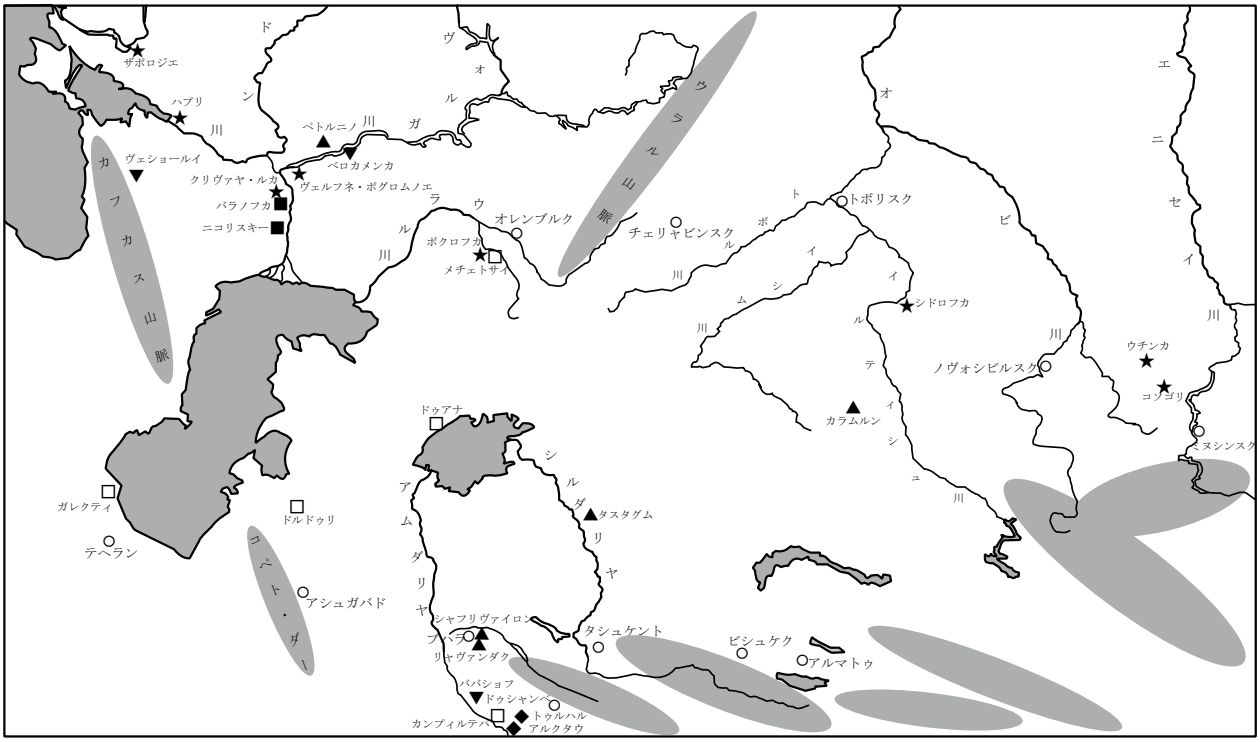


図 7．関係主要遺跡地図（○主要都市、★A 類出土遺跡、▲B 類出土遺跡、▼C 類出土遺跡、■D 類出土遺跡、◆E 類出土遺跡、□F 類出土遺跡）

のは、中国で作られた帯飾板を模倣したものであろう。このような階段状の透かし紋様の金具は、シドロフカやババショフでも発見されている。伝クバン地方出土品は、枠の構成や動物の身体に配置された象嵌が、北中国のものと極めて類似しており、中国製品である可能性は否定できないが、シベリヤなどの他の可能性も考えるべきであろう。ザポロジエ出土品も同様で、シベリヤ・コレクションの同類といってよい。サルマタイの動物意匠とは少し異質であると思われる。ハプリ出土品は、その龍紋様からみると、やはり中国のものから影響を被っているのであろう。

シベリヤ・コレクションの帯飾板と北中国のそれとの関係は、まだ解明されたとは言い難く、どこに起源があるのか不明であるが、それらをここでは便宜上一体として考えれば、東方からの影響が西方の黒海沿岸まで、かなり直接的な形で及んでいることが窺える。もちろんそれは、サルマタイの墓から出土する前漢鏡や、最近クリミヤで出土した漢代の漆器のことなどを考えると（奈良国立博物館　2011；Loboda et al. 2002; Puzdrovskij et al.　2004）、当然のことといってよい。今のところ、この種の帯飾板はそれより南方の中央アジアでは確実な発掘例がないが、例えばアフガニスタンのティリャ・テペ出土の前漢鏡のことを考えれば、将来発見されることもありうるであろう。

Bの猛獣と駱駝の闘争紋帯飾板は、中央アジアに特有のものといってよいであろう。ヴォルガ流域のペトルニノからも出土しているが、主な出土地はカザフスタンとブハラ・オアシスである。このような猛獣と駱駝の闘争を表した帯飾板については、2つの考え方ができる。一つはサルマタイからサウロマタイ時代に遡る駱駝紋様の伝統を考慮するものであり、もう一つは中国の北の中国北方系青銅器の帯飾板から影響を受けたという考え方である。匈奴の帯飾板からの影響については、多くの研究者の認めるところである。2頭の馬が争う場面を表したザバイカリエのデレストゥイ墓地出土品はそのよい例であるし（図 8, Миняев 1998, Табл. 84-15）、また他にもグリフィンが駱駝を襲う場面を透かし彫りで表した帯飾板が知られている。そちらの方がより近いと言えるかもしれない（図 9, 予平、戴戈　1985，図 5）。

駱駝紋様の伝統を主に考えると年代は早くなる可

図８．デレストゥイ出土帯飾板

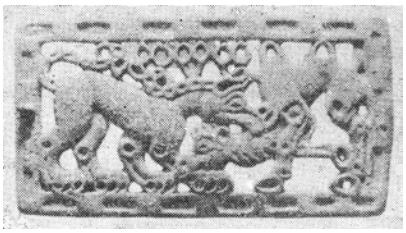


図９．グリフィン・駱駝闘争紋帯飾板

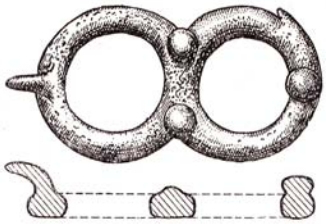


図 10．ベレジノフスキー出土８字形留め金具

能性もあるが、中国あるいは匈奴の帯飾板の影響を考え、それらが五銖銭を伴うことがあることを考慮すると、前漢の前２世紀末から前１世紀頃の可能性が強くなる。次のＣとの類似や、ペトルニノのサルマタイ墓出土例を考えると、その可能性の方が大きいであろう。筆者もそれに賛成したい。

Ｃの駱駝紋透し彫り帯飾板はＢの帯飾板と類似しており、またその影響を受けて成立した可能性もある。年代もそれほど離れてはいないであろう。しかしその分布は、今のところＢとは逆に、ババショフを除くとヴォルガ・ドン川の流域に集中している。年代も、サルマタイの墓から出土したものがあり、おそらく同じく前２世紀末から前１世紀を中心とする時期でよいであろう。

Ｄにも、やはり東方、中国の影響を思わせるところがある。枠の紋様には、中国の前漢の帯飾板とのある程度の類似が見られる。ニコリスキー出土品は長方形の窪みが連なる枠で縁取られているが、このような枠も中国や南シベリアの帯飾板には時折みられる。たとえば、M. デヴレトの紹介する２頭の牛の佇立する図柄の帯飾板などは、その例として挙げることができよう (Дэвлет 1980, Табл.1-6)。

Ｅの、縦方向の孔と外側向きの鉤状突起の付いた単純な板状のものは、現在知られているものは比較的少ないが、当時は多く使われていたのであろう。骨製などの非金属製の飾板との類似も見られる（高濱秀　2002，図版Ⅳ -10-13，16，17 など）。

ＦもおそらくＢやＣの系統に入る型式であろう。ガレクティ出土品は、そのことをよく示している。この型式は、サルマタイの領域だけでなく、黒海沿岸のギリシア都市、中央アジア、そしてパルティア時代のイランなど広い地域に分布した。

メチェトサイの帯飾板は表面の向かって右側に突起があり、左側には現在失われているが、元来鉤があったと考えられている。ドルドゥリ出土品も同様に、鉤の反対側の端部の、表面側に突起がある。両端ともに表面側に突起および鉤があるのは、このような帯飾板・帯金具のなかでは特殊である。これらはサルマタイの８字形留め金具の影響と考えられる。

８字形の留め金具は (図 10)、サルマタイにおいて広く使用されたもので、モシュコヴァによると、発掘例から剣や矢筒を帯に吊るすためのものが多いが、帯の留め金具として用いることも可能であるという（Мошкова 1960, Рис.1-1, с.297）。

イランのパルティア時代の帯飾板のなかにも、枠の一端に鉤状突起、表面の他の端にもボタン状の突起があるものがある（Curtis 2001, Pl.XII, XIII）。これらもこのＦ類の範疇にはいるものであり、究極的には、サルマタイの８字形留め金具の影響を受けたものと言ってよいであろう。

このＦ類の帯飾板が、ユーラシア草原西方で使用されたこの種の飾板の中では、最後のものと考えられる。そのあとは、針の装着された帯金具が普及するのであろう。

引用文献

有松唯

2010「イラン、デーラマン地域における鉄器時代Ⅳ期からパルティア期にかけての土器編年」『西アジア考古学』第 11 号、pp.89-100.

ウズベク共和国文化省ハムザ記念芸術学研究所・創価大学

1991 『南ウズベキスタンの遺宝　中央アジア・シルクロード』.

古代オリエント博物館・朝日新聞社編集

1991『南ロシア騎馬民族の遺宝展　ヘレニズム文明と

の出会い』古代オリエント博物館 .

朱捷元，李域錚

1983「西安東郊三店村西漢墓」『考古与文物』1983-2, 22-25 頁、図版五 -7.

鄒厚本、韋正

1998「徐州獅子山西漢墓的金扣腰帯」『文物』1998-8, 37-43 頁 .

髙濱秀

2002「ユーラシア草原地帯の非金属製帯飾板」『金沢大学考古学紀要』第 26 号 50-63 頁 .

髙濱秀

2011「中国の鍑」草原考古研究会編『鍑の研究―ユーラシア草原の祭器・什器―』雄山閣，9-93 頁 .

中国科学院考古研究所編・杉村勇造訳

1963『新中国の考古収穫』美術出版社 .

東京国立博物館

1997『大草原の騎馬民族―中国北方の青銅器―』東京国立博物館 .

東京国立博物館、大阪市立美術館、日本経済新聞社

1985 『シルクロードの遺宝―古代・中世の東西文化交流』.

東京国立博物館・日本経済新聞社

1978『エルミタージュ秘宝展』東京国立博物館 .

東京大学東洋文化研究所

1968『デーラマン Ⅲ ハッサニ・マハレ，ガレクティの発掘 1964』.

奈良国立博物館

2011『特集展示－修復完成記念―シルクロードを旅した漢代漆器』.

寧夏文物考古研究所，中国社会科学院考古研究所寧夏考古組，同心県文物管理所

1988「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古学報』1988-3, pp.333-356; pl.9-12.

三宅俊成

1976 「デーラマン古墓出土の土器の考察」『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術篇』東京、pp.297-334.

予平 , 戴戈

1985「陝西省博物館収蔵的匈奴銅飾牌」『文博』1985-5, pp.38-42.

Curtis, V. S.

2001 Parthian belts and belt plaques. *Iranica Antiqua* vol. XXXVI, pp.299-327.

Davis-Kimball, J., L. T. Yablonsky

1995/96 Excavations of Kurgans in the Southern Orenburg District, Russia ― Questions Concerning the Northern Silk Route―. *Silk Road Art and Archaeology* Ⅳ , pp.1-16.

Heikel, Axel

1894 *Antiquités de la Sibérie Occidentale conservés dans les musées de Tomsk, de Tobolsk, de Tumeń, d'Ékatérinebourg, de Moscou et d'Helsingfors*. Helsingfors.

Hori, A.

1981 Dailaman and Halimehjan―Re-examination of their chronologies―. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 3, pp.43-61.

Loboda, I. I., A. E. Puzdrovskij, J. P. Zajcev

2002 Prunkbestattungen des 1 Jh.n.Chr. in der Nekropole Ust'-Al'ma auf der Krim. Die Ausgrabungen des Jahres 1996. *Eurasia Antiqua* 8, SS.295-346.

Minns, E. H.

1913 *Scythians and Greeks.* Cambridge at the University Press.

Puzdrovskij, A. E., J. P. Zajcev

2004 Prunkbestattungen des 1 Jh.n.Chr. in der Nekropole Ust'-Al'ma, Krim. Die Grabungen des Jahres 1999. *Eurasia Antiqua* 10, SS.229-267.

Акишев, А. К.

1976 Новые художественные бронзовые изделия сакского времени. *Прошлое Казахстана по археологическим источникам*. Алма-Ата.сс.183-195.

Артамонов, М. И.

1949 Раскопки курганов на р. Маныче в 1937 г. *Советская археология* XI, сс.305-336.

Бобров, В. В.

1979 О бронзовой поясной пластине из тагарского кургана. *Советская археология* 1979-1, сс.254-256.

Дворниченко, В. В., С. В. Демиденко, Ю. В. Демиденко

2008 Набор пряжек из погребения знатного сарматского воина в могильнике Кривая Лука Ⅷ . *Проблемы современной археологии*. Москва, сс.239-242.

Дворниченко, В. В., Г. А. Федоров-Давыдов

1989 Раскопки курганов в зоне строительства Калмыцко-Астраханской и Никольской рисовых оросительных систем. *Сокровища сарматских вождей и древние города Поволжья*. Москва. сс.14-132.

Дэвлет, М. А.

1980 *Сибирские поясные ажурные пластины*. Свод археологических источников. Вып. Д4-7.

Засецкая, И. П.

1979 Савроматские и сарматские погребения Никольского могильника в Нижнем Поволжье. *Труды Государственного Эрмитажа*. сс.87-113.

Королькова, Е. Ф.

1999 Образы вербрюдов и пути их развития в искусстве ранних кочевников Евразии. *Археологлический сборник* 34, сс.68-96.

Кошеленко, Г. А., И. Т. Кругликова, В. С. Долгоруков

1984 *Античные государство Северного Причерноморья*. Москва.

Мандельштам, А. М.

1966 *Кочевники на пути в Индию*. МИА No.136. Москва-Ленинград.

1975 *Памятники кочевников кушанского времени в Северной Бактрии*. Ленинград.

Манцевич, А. П.

1976 Находка в Запорожском кургане (К вопросу о сибирской коллекции Петра I). *Скифо-сибирский звериный стиль в искусстве народов Евразии*. Москва, 1976. сс.164-193.

Маргулан, А Х., А. К. Акишев, М. К. Кадырбаев, А. М. Оразбаев

1966 *Древняя культура Центрального Казахстана*. Алма-Ата.

Матюценко, В. И., Л. В. Татаурова

1997 *Могильник Сидоровка в Омском Прииртышье*. Новосибирск.

Миняев, С. С.

1998 *Дырестуйский могильник*. Археологические памятники сюнну Вып.3. Санкт-Петербург.

Мордвинцева, В. И., О. А. Шинкарь

1999 Сарматские парадные мечи из фондов Волгоградского областного краеведческого музея. *Нижневолжский археологический вестник*. Вып.2. сс.138-148.

Мошкова, М. Г.

1960 Раннесарматские бронзовые пряжки. *Материалы и исследования по археологии СССР No.78 (Древности Нижнего Поволжья. том II),* Москва, сс.293-307.

Мошкова, М. Г.(ответ. ред)

1992 *Степная полоса Азиатской части СССР в скифо-сарматское время*. Москва.

Нащекин, Н. В.

1967 Косогольский клад. *Археологические открытия* 1965 г. Москва.сс.163-165.

Обельченко, О. В.

1978 Шахривайронская пряжка. *История и археология Средней Азии*. Ашхабад, сс.68-81.

1992 *Культура античного Согда*. Москва.

Сергацков, И. В.

1995 Новые данные к хронологии раннесарматской культуры. *Российская археология* 1995-1, сс.148-158.

1999 Находки в зверином стиле из сарматских курганов на Иловле. *Нижневолжский археологический вестник*. Вып.2. сс.36-41.

Смирнов, К. Ф.

1964 *Савроматы*. Москва.

1975 *Сарматы на Илеке*. Москва.

Ягодин, В. Н.

1978 Глава 3. Памятники кочевых племен древности и средневековья. *Древняя и средневековая культура Юго-Восточного Устюрта*. Ташкент, сс.79-198.